

清水比庵 家族への厚情（両親・弟妹）

清水比庵は芸術作品だけでなく、まどかな人間味も多くファンを集めた背景となっていた。家族に対してもその中心として皆に慕われた一生だった。本章では両親、弟妹との温かい交わりについて述べる。

1 父 質（ただし）

備前松山藩の貧乏士族出身の父質は比庵が地元高梁中学に入ったころ 46 歳で亡くなった。漢詩を学んで号を「溪外」と称した。漢詩を紙に大書して襖に張って眺めていたので長男の比庵も傍で字を書いたが、それを見て「この子も字が下手だと嘆いていたよ」と比庵は話している。

「和紙を綴じた手製の帳面にぎっしりと細かい字で漢詩が書かれているものを父（比庵）は大切にしていたが、表紙には“溪外遺稿”と記してあった」と娘明子（私の母）が語っている。比庵が書の道に進むスタート点は父質であったようである。

わが父の 命終りし 齢とも われはなりけり あはれなるかも

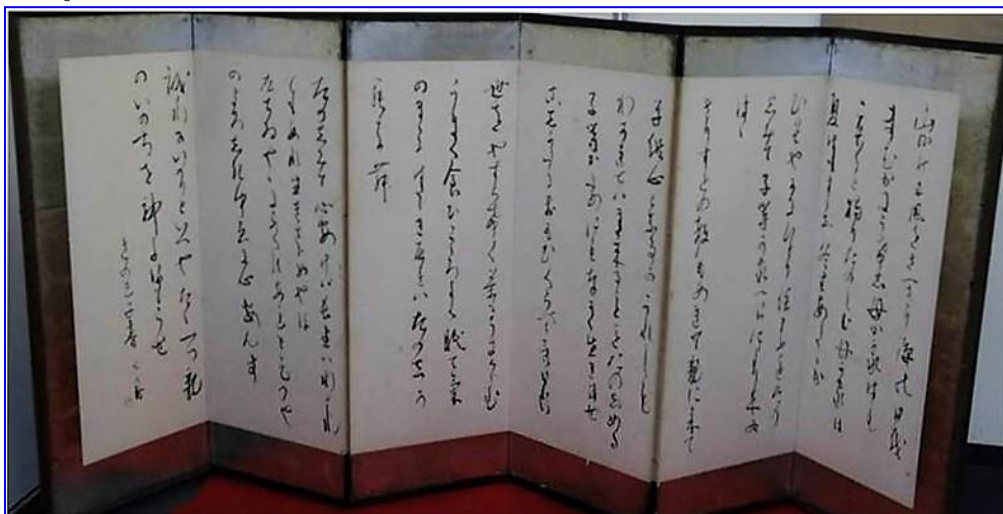
2 母 スエ

比庵の母スエは昔の士族の妻女を想わせる風格をしのばせた美人であった。しかし夫の死で一家の大黒柱を失った苦労は大変で、長男の比庵は某家の書生に住込み、スエは比庵以外の子供 3 人を抱えて夫の勤め先であった笠岡の借家で針仕事で糊口をしのいだ。



比庵の母スエ

比庵が大学を出て結婚、そして司法官から銀行員になって東京に移ったのに伴って弟妹達も笠岡を離れて上京したが、スエは一人笠岡にとどまった。比庵は生活費は勿論母の日常生活に気にかけていた。銀行員時代に比庵が母に贈る歌 10 首を書いた小屏風には笠岡で一人暮らしの母を想う若い頃の比庵の気持ちがよく出ている。この屏風をスエは大切にしておいてよく訪れた人に見せていた。スエが亡くなった時に形見分けで末弟の浩（三溪）がこの小屏風を貰い、後年比庵が世話になった母親孝行の日興証券初代社長遠山元一氏に贈られ、現在遠山記念館にある。30 歳代の比庵の貴重な文献である。



母に贈る歌

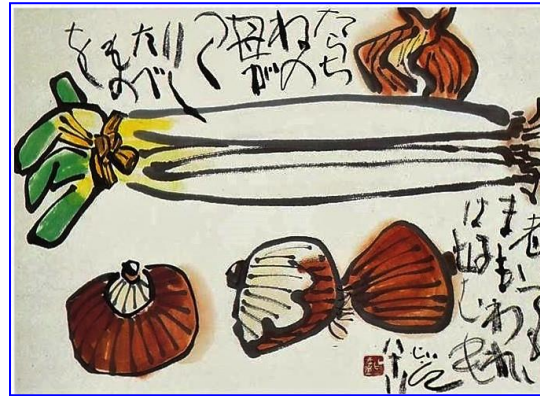
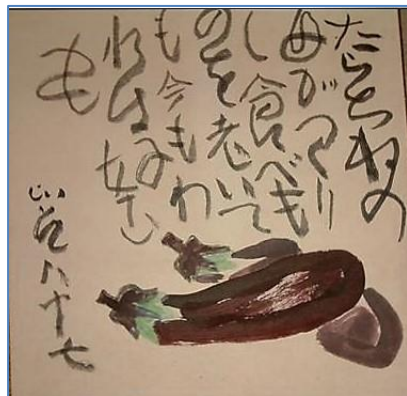
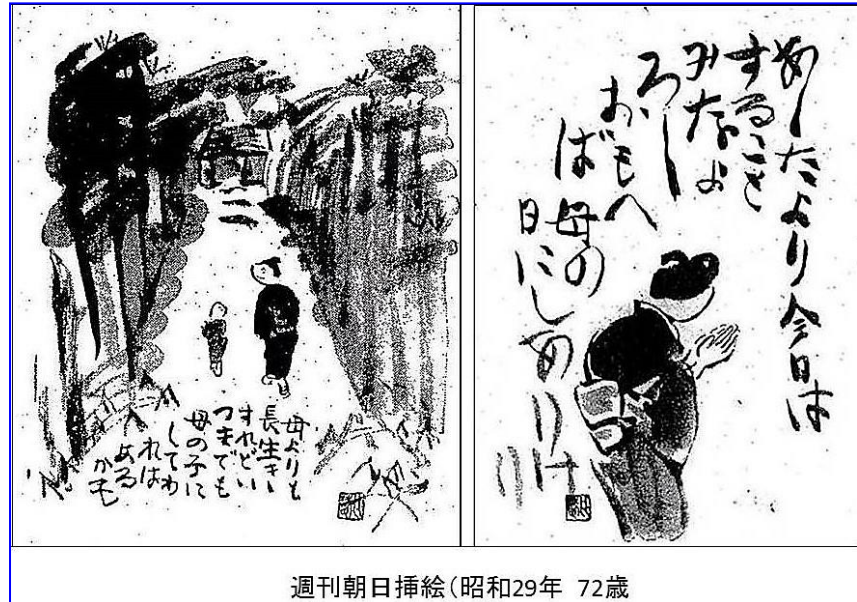
山かげに風をききり海の日を
まむかにうけし母の家なも
こそそと独りたのしむ母が家は
夏はもすとし冬はあたたか
ひそやかにひとり住まふをたのしみて
子等が家へはたより来ぬは
きりすとの教もあれと親に来て
子供心となるがうれしも
わかれてはまた来ることをたのしめる
子等がぬにもながく生きませ
こしかたにおもひくらべてこの日頃
世をやすらしく茶もつまからむ
うまく食ひころよく眠て気のまくに
はたらき居ればたのしからなむ
たのしみて心安ければ長生きは
わすれてもあれ生きざらめやは
たちあやにふくあれど色つやの
よろしきゆゑに心安んす
誠わがいのりといへやたゞ一つ
親のいのちを神よまもらせ

きのえ子春 ヒ冊

比庵が若い頃（大正時代）に独り住いをしている母に十首の歌を屏風に書いて贈ったもの

昭和 29 年 3 月の週刊朝日春季増刊号に川合玉堂に「我が母の記」が記載されその挿絵を比庵が担当したが、この歌入り挿絵を自分の母を想って描いたと玉堂に伝えている。

左 母よりも
長生きすれど
いつまでも
母の子にして
われはあるかも
右 あしたより
今日はすること
みなよろし
おもへば母の
日にしありけり



たらしねの 母がつくりし 食べ物を 老いても今も われは好むも
(87 歳) (88 歳) (93 歳)

晩年スエは体調を崩して家が広がった次男郁のところに移り大正 14 年 63 歳で亡くなった。

- ・日の日中 草にくぐりて ひそみもだす 小鳥のごとく 母の喪に居り (大正 15 年正月)
- ・老いぬらば おのずからにも わが顔の やさしくなりて 母に似るかも

3 弟妹

次弟 清水 郁 (いく)

妹 岡本章(子) (ゆきこ)

末弟 清水 浩 (こう 号は三溪)

比庵は幼くして父を失った弟妹を父親代りになって経済面を含めて面倒を見た。司法官から銀行員になって東京九段で生活していた時は次弟郁が家の近くに下宿して食事は比庵宅でとり、妹章子は同居して和洋裁縫学校に行っていた。家計が苦しいので比庵は夜間学校の教師もしたし、銀行へは片道 40 分を歩いて通ったが、妻の鶴代はやりくりで大変だったようだ。郁が義姉鶴代に「兄貴は無心に行くと不思議に何時どんなときにも金を持っていた。偉いものだ。」と言った。その後末弟浩の勉学費用も負担した。このため弟妹達は長兄比庵に対する感謝の気持ちを忘れず後にそれぞれ比庵を助けて比庵芸術の確立に貢献した。

3-1 次弟 郁

郁は兄妹4人の中でただ一人芸術方面に手を付けなかった。弁護士として活躍し、逗子に広い持家を建てた。家が狭い比庵に代わって晩年体調を崩した母親を引き取り、また娘2人が比庵の娘明子と仲が良いこともあって交流は蜜であった。



大正3年 郁と明子

志賀尚を明子の婿として紹介もした。大正3年 郁と明子
昭和39年比庵82歳の時に亡くなった。

4人兄弟の最初の死を悼み比庵は次の歌を残している。

年老いて 四人揃ひて ありけるが その喜びも 今日までなりき

3-2 妹 章(子)

章(子)は「頭脳明晰で鋭い判断力と勇気をもった男勝りの女性であった。笠岡の呉服屋の嫁になって夫を助け家業に励んだ。子宝に恵まれなかったが人の世話を良くして周囲の人々に尊敬され慕われていた。また書を良くし和歌に秀いで、比庵の大きなサポーターであった。突然妻に先立たれて呆然となった比庵を故郷笠岡に呼んで温かい手を差し伸べ、戦争中は比庵一家は笠岡への疎開で大変世話になった。戦後東京駒込に居を移してから比庵は一年の三分の一を笠岡の章の家で過ごし、三芸を磨き上げていった。章の歌と書を比庵が川合玉堂に紹介すると玉堂は大いに感銘して章との合作を毎年作るようになった、病弱な章の為に比庵は玉堂からいただいた作品や自分の作品を章に預けて楽しませていた。章は亡くなる前に見舞いに訪れた明子に「比庵は清水家の宝だよ。」と言っている。昭和40年に亡くなったが、比庵は章の生前の希望通り分骨して清水家の墓地に章の墓を作り、墓碑も書いている。



比庵と章（章子の別宅にて）

昭和39年 比庵82歳

あたゝかき 人にかこまれ 惜しまれて 且つ仰がれて しあわせにねむる 兄比庵



玉葱と唐辛子
画 比庵
歌 岡本章

こはる日の
ひさしむくと
垣の木に
ざるや飯ひつ
かけならべたる



茶事 画 川合玉堂 歌 岡本章子
露路奥の友が住処は奥ひろみ 木立を深み 下苔の
しめりほけく 朝のむし ひろなきある いしの根に
秋海棠も 咲きそめて 紅さやかに あひ並び 桔梗の花も
乱れさく 秋のすがたの ややぐに 暑し書しと にくみてし
葉月も二日 あましたる 夏もなごりの この庭の 野点の席へ
まかりきて 七歌人が 朝茶いたく
反歌 秋めたつ 泰山木の ほつ枝より
あさの陽筋は さしそめてけり

章の死から半年後の昭和41年、比庵は宮中歌会始の召人に推挙される栄誉を受けたが、その時比庵は「章がせめてもう半年生きていたらなあ。おれは章に一番見て貰いたかった」と話している。

3-3 末弟 浩(こう)

比庵より14歳年下の末弟浩は中学から大学まで比庵が面倒を見た。大学時代に銀行員だった比

庵から浩宛ての葉書（絵手紙）が多く残っているが、比庵が父親代わりであることがよくわかる。

浩は大学卒業後実業界に入って活躍したが、比庵の作品が大好きで自分も画を良くし、号を三溪と名乗った。（父溪外の三男の意味）そして比庵の芸術活動を助け共にあゆんだ、

そのなかで特にポイントとして挙げられるのは次の3点である。①日本画家の巨匠川合玉堂を紹介した。②比庵/三溪の作品展の母体「野水会（やすいかい）」を作り川合玉堂の賛助を得て作品展を毎年開いた。第一回は妻の急死で落胆している比庵を奮い立たせた。③比庵 88 歳の喜寿を祝い比庵の歌・書・画を集めた美術本「野水帖」を作った。

比庵没後晩年は比庵の作品を東京祖師谷の自宅の玄関・座敷・居間・寝室に飾り、比庵と過ごした楽しい思い出の中に生きた。

床の間に 合作をかけて 在りし日の 比庵と遊ぶ 三溪八十五（比庵没後6年）



比庵が学生時代の浩（三溪）に送ったはがき（絵手紙）



作品展会場で比庵と三溪



三溪の作品

4 清水家の墓

比庵の墓は三か所あり分骨されている。

- ・生まれ故郷高梁市松連寺（比庵と三溪の兄弟墓）
- ・清水家の菩提寺笠岡威徳寺（比庵の両親、比庵夫妻、弟郁夫妻、妹章の墓）
- ・東京雑司ヶ谷の墓（比庵、娘明子夫妻、孫清水易）

これらの墓石はすべて比庵が生前に調達し、書いたものである。特に威徳寺の比庵夫妻の墓と章の墓には生前に書いた墓碑が付いている。比庵は死後の家族の安寧まで配慮していた。 以上

